

『午後のギター ～ Guitar Music in the Afternoon』

クラシック音楽の世界で、ギターという楽器は、華やかなスポット・ライトを浴びる存在とは言えないかもしれません。しかし、ギター音楽の小さな扉を開ければ、その向こうには、豊かな音世界が果てしなく広がっているのです。

このコンピレーション・アルバムには、午後のティー・タイムはもちろん、夜のやすらぎのひとつ、遅く起きた休日の朝、リビング・ルーム、オフィス、カフェ・・・様々な時間と空間を心地よく演出してくれるBGMとしても最高で、かつ、1曲1曲とじっくり向き合えば、それぞれの楽曲の奥深いコンポジションの機微を堪能することができる、素晴らしいギター曲をたっぷり詰め込みました。

どうぞごゆっくりお楽しみください。

～収録曲について～

1. バリオス (1885-1944) : 森に夢みる

パラグアイの先住民グアラニー族にルーツを持つ天才コンポウザー・ギタリスト、アグスティン・バリオスの代表曲のひとつ。1918年の作とされる。1曲の中で、ヨーロッパのクラシック音楽とラテン・アメリカの伝統音楽の、それぞれのエッセンスが自然に溶け合う様は、なんとも魅力的。

2. リョベート (1878-1938) : マズルカ

スペイン、バルセロナ出身のミゲル・リョベートは、卓越した演奏力で人気を博し、ヨーロッパはもとより南北アメリカでもコンサート・ツアーを行った名ギタリスト。甘やかなメロディが印象的なこの曲は、代表作のひとつ。

3. タルレガ (1852-1909) : アルハンブラの思い出

リョベートの師匠でもあった、スペイン、バレンシア州ビジャレアル出身のフランシスコ・タルレガは、クラシック・ギターの発展に大きく寄与したヴィルトゥオーゾ。作曲家としては、この曲に代表される“キャッチー”なメロディを多く残した。

4. マイヤーズ (1930-1993) : カヴァティーナ

20世紀後半に、主に映画音楽の世界で活躍したイギリスの作曲家、スタンリー・マイヤーズの代表曲。'78年の映画『ディア・ハンター』のテーマ曲としておなじみ。

5. ブローウェル (1939-) : キューバの歌 (子守歌)

ハバナ出身のレオ・ブローウェルは、作曲家、ギタリスト、指揮者として活躍するキューバ音楽界の重鎮。難解な作品も多いが、この曲のような親しみやすい楽曲では、優れたメロディ・センスが輝きを見せる。

6. ペルナンブーコ (1883-1947) : 鐘の響き

ブラジル北東部ペルナンブーコ州ジャバ出身のジョアン・ペルナンブーコは、先住民とポルトガル移民のブラッド・ラインを

併せ持つコンポウザー・ギタリスト。後のサンバやショーロの源泉となったブラジルのポピュラー・ミュージック「ショーロ」の創成期に活躍した。この曲の軽やかなオシャレ感は、現在のブラジリアン・ポップスのそれに勝るとも劣らない。

7. ポンセ (1882-1948) : 組曲 二長調 - サラバンド

20世紀前半に活躍したメキシコのクラシック界を代表する作曲家のひとり、マルエル・ポンセの作品。ピアニストだったポンセだが、そこはラテン・アメリカの音楽家。素晴らしいギター曲も多く残した。セレクトしたのは、ヨーロッパ的な抒情性が光る1曲。

8. ダウランド (1563-1626) : タルトンの復活

ロック・アーティストのスティングが“カヴァー・アルバム”をリリースしたこともあり、昨今人気が高まっているジョン・ダウランドは、イギリスのリユート奏者でソングライター。アイルランド出身とも言われる。この曲も本来はリユートで奏でられるが、ここではギター版で。

9. ソル (1778-1839) : ディヴェルティスマン Op.34 慰め - II. 第2曲 主題、変奏とワルツ

バルセロナ出身のフェルナンド・ソルは、ギターの楽器としての可能性を広げた、クラシック音楽史上最も重要なギタリストのひとり。母国スペインでは「ギターのベートヴェン」とも呼ばれるという。古典派の香り漂うこの作品は、本アルバム唯一の二重奏曲。

10. ガルデル (1890-1935) : 想いの届く日

歌手、ソングライター、俳優として国際的に活躍したアルゼンチン・タンゴ界のスーパー・スター、カルロス・ガルデルの作品の中には、ギター独奏用にアレンジされ、クラシック・ギタリストのレパートリーとして高い人気を得ているものも多い。この曲はその代表格であり、ガルデルの名曲中の名曲。

OTTAVA selection volume 2は本田聖嗣選曲のクリスマスアルバム。

2014年11月下旬リリース予定